

占領開拓期と結婚／家族

近代日本における結婚および家族という制度を捉える際、そこに一九四五年という境界線を強調することは別段、不思議な振る舞いではないだろう。第二次世界大戦の敗戦を迎えた日本が、憲法をはじめとした民主的な体制を法的に整備していく過程は、それまでの日本社会がいかにジェンダー平等から程遠い構造と価値観を有していたかを当然ながら気付かせてくれるものである。

しかし、一九四六年の日本国憲法制定、四七年の民法改正によって、結婚や家族のあり方が一変したという常套的な認識もまた不正確とならざるを得ない。生活のベースに存在する法制度は、人間の思考や嗜好を規定する重要な一因ではもちろんあるものの、個々の環境においてつきまとう要素（家族内のメンバー構成、地域差、経済的な格差など）が絡み合うことで、同時代であっても多種多様な結婚／家族の形が浮かび上がってくる。すなわち、俯瞰的にその傾向が指摘できる非対称的な男女の立場と、人々の実践によって局地的に発生し得るジェンダー秩序を並べる作業こそが重要になってくると言えよう。

これに加え、「占領開拓期」というオルタナティブな時代区分を設定することで、むしろ戦前／戦後の変化とは異なる「性」現象のグラデーションを見ることができるはずだ。そこからは、現在ほとんどの人々が当たり前のものとして思い描いている「日本国」の領土概念と日本列島という地理的な条件、さらにそこへ住まう人々＝日本「国民」という存在がそれぞれ安直にイコールで結び付けられるものではない事態も露わになってくるだろう。本特集には、以上のような問題意識のもとに集まった論考が掲載されている。以下、各論考の概要を確認していこう。

林麗婷「日中恋愛・結婚」のナラティブともう一つの可能性——中国近代文学を読む」は、日清戦争以後に多く題材化された「日本人と中国人の自由恋愛・結婚をめぐる小説」を取り扱っている。郁達夫、郭沫若、張資平といった中国人作家たちの小説が、男性的なジェンダーやセクシュアリティを基盤とする視線によって日本人女性を

性的対象化する特徴を備えていたことが指摘されるが、そのことで作家の態度を告発するというのではなく、中国の近代化に伴う葛藤の問題と重ねて分析されている点に大きな意義が存在する。後半では、女性作家である凌叔華の「千代子」（一九三四年）を対象に、日中関係が悪化する最中において、単純なナショナリズムを相対化する表現として同作の可能性が掬い上げられている。中国近代文学の領域において、同時代の「日本」がどのように対象化されていたかを知る上でも、林論は貴重な視座を提供している。

伊藤允の「反戦小説を作り出す性役割——江戸川乱歩「芋虫」の持つ批判性——」は、発表当時において「反戦」的な要素が読み込まれた「芋虫」（一九二九年）を、作家の意図に沿わない観点から再読を行う。乱歩自身は本作を「左翼イデオロギー」と結び付けないよう注意深く説明しているが、伊藤論は同時代の日本社会で課されていた性役割と人物の言動および物語構造を詳細に検討することで、作家の意図と読者による受容の「食い違い」を見事に分析している。また、若松孝二監督の映画『キヤタピラー』と本作をアダプテーション理論によって比較し、平時／戦時いずれにも通底する「性暴力」概念を中心に据えることで作品の優れた読み替えが為された事実を論証してみせる。鮑浦千穂「太宰治『皮膚と心』と『葉桜と魔笛』論——家庭環境を中心に——」は、両作の主要登場人物が「ひとり親家庭」で過ごすという状況に着目する。先行研究においてこれらの物語が「女性独白体」あるいはジェンダーの観点から分析される例は多く存在したが、「ひとり親」という家庭環境の作用を基軸に、女性が半ば自覚的に背負わざるを得ない性役割／規範を小説より抽出していく手つきは堅実である。「父親」の存在を主たる要因として「閉鎖的空間」のように機能している家庭の場を、太宰の作品は現実と微妙にずれた形で描き取る。鮑浦論はここに文学表現を分析することの重要な意義——同時代の家庭とそこから要請される女性像、さらに当事者である女性自身が抱え込んだ欲望の複数性を見るのである。

坂堅太「『職業婦人』以後、「BG」以前——高度経済成長始動期の女性事務員表象についての一考察——」は、一九五〇年代前半より源氏鶏太が執筆した数々の「BG小説」（女性事務員を主人公とする作品）と、同時代の女性にま

つわる結婚と労働の言説を比較している。タイトルにもあるように、戦前期から存在する「職業婦人」と、高度成長期の開始以降に出現する「B G（ビジネス・ガール）」の狭間における女性の立ち位置を文学より探る坂論は、まさしく戦前／戦後と二項対立的に扱われるジェンダー状況への認識に亀裂を入れる試みである。職場において恋愛結婚を行う、「自分の意志」で配偶者を選ぶことは、主体的に自らの家族を作り上げていく存在として女性を位置付ける「戦後民主主義」的な流れと呼べるものであったが、一方で恋愛結婚そのものに内在する政治性が、職場労働において男女間の明確なジェンダー差を定着させた功罪が精緻に考察されている。この課題は、一九八五年に制定された男女雇用機会均等法を通過した現在にあっても、未だ根本的な解決を見ていない構図であり、その意味でも坂論の射程は限りなく広い。

最後に、泉谷瞬「生き延びた記憶の宛先——村田喜代子『エリザベスの友達』とジュリー・オオツカ『屋根裏の仏さま』——」は、占領開拓期においてあり得たであろう「結婚」の自由と不自由を並置し、そうした生活を潜り抜けた女性たちの記憶が語られること、そして現在時点でのこのような表象と対峙することの意義を論じる。タイトルに示された両作品は二〇〇〇年代以降に発表された小説であり、占領開拓期の同時代に執筆されたものではないという意味で、少なくとも本特集の中では特異な立場にある。しかし過去の出来事を読むとは、必ずしもその当時に生まれたテキストとだけ向き合う行為に限定されないだろう。長い期間を経た後にある個別の経験が他者の経験と共振することで、主体や領土にまつわる読者の固定観念を破砕し、別様の想像力を喚起する力を持つ可能性を泉谷論は模索する。

以上の各論考はそれぞれ独立したものとして書かれた文章であるが、占領開拓期の結婚／家族を思考するにあたって、ゆるやかに連接されてもいる。本特集によって俎上に載せられた主題が機関誌の読者に受け継がれ、さらなる論考へ展開していくことを期待したい。

（泉谷瞬）